

被災者の声届ける

海星高生 西陵中で体験発表



西陵中の生徒にボランティア体験を話す海星高の生徒

東日本大震災の被災地でボランティア活動に当たった室蘭・海星学院高校(堺俊光校長、235人)の生徒が、登別市西陵中学校(原洋二校長、166人)で、全校生徒に被災地の状況や被災者の声などを届けた。

海星高では、2012年(平成24年)から希望者を募り被災地でのボランティア支援を続けている。今年

は5人が7月5～9日の日程で、岩手県釜石市を訪れ、傾聴ボランティアなどに当たった。

池田安里さん(1年)、有路華さん(2年)、小森萌華さん(同)、平川真衣さん(同)、藤原涼真さん(同)が発表した。有路さんは被災地でのボランティアを通して「後悔しないためにも日ごろの言動や態度に気を付けたいと思った」と話し「皆さんに伝えたいのは、当たり前のことなど何一つない」ということ。大切な人や身近な人に『ありがとう』を伝えてみませんか」と呼び掛けた。

藤原さんは、被災地の消防団員との会話で「被災当時は、民家にある食べ物を持つて行く人、ATM(現金自動預払機)を金属バットで壊す人などがいたと聞いた」と述べた。中学生に①災害はどこでも起こりうる②最低限の防災意識を持つ③災害を甘くみてはいけないの三つの心構えを紹介した。

(高橋紀孝)